

匿名状況におけるネガティブ発言による心理的ダメージ

－「死ね」「生きてる価値ない」「死んでほしい」「氏ね」の比較－

瀧澤 純(ノースアジア大学)

1. 問題と目的

SNS での誹謗中傷、ネットいじめなど、匿名状況におけるネガティブ発言は人を追い込み、人を死に至らしめることがある。2020年5月に起きた女子プロレスラーの自殺の事件では、SNS 上での誹謗中傷を行ったとして、2020年12月に20代男性が逮捕された(読売新聞オンライン, 2020)。これらの社会情勢を受けて、誹謗中傷などを行った投稿者を特定するための裁判手続きを簡略化する動きが起こり(読売新聞オンライン, 2020)、2021年に法改正が行われた。

しかし、このような問題に対応するために、プロバイダ責任制限法改正などの法的な対応には限界があることも指摘されており(小向, 2021)、当事者にとって重大な問題となる前の予防的な対応も必要である。例えば、インターネット利用者への情報リテラシー教育や(総務省, 2021)、インターネットプロバイダやインターネットサイトの管理者や利用者による規制などが行われている。さらに近年は、WEB での悪口や誹謗中傷などのネガティブ発言を抽出して分類し、特定のキーワードの書き込みや閲覧ができないようにするフィルタリング機能への応用も試みられている(石坂・山本, 2010; 松葉・柳井・河合・伊須, 2011)。将来的には、より高い精度で悪口や誹謗中傷を判別できる可能性がある。

ただし、悪口や誹謗中傷を扱う際には、依然として根本的で複雑な問題が残されている。それは、言語的表現だけで悪口や誹謗中傷を判別することは難しく、「何をもって悪口や誹謗中傷とするのか」があいまいであるという点である。特に本稿では、「発言によって受け手が傷つく度合い」についての根拠がないままに議論が行われている点に着目する。そして、発言によって受ける傷つき度合い、すなわち、発言による心理的ダメージを測定した研究は、これまでの研究ではみられない。そこで本研究では、「死ね」という発言に関する4つの形態「死ね」「生きてる価値ない」「死んでほしい」「氏ね」を用いて、心理的ダメージを明らかにすることを目的として行った。

2. 方法

2.1 調査対象者

東北地方の大学で心理学に関する授業を受講する学生101名に、研究への参加を依頼した。未記入の回答があった2名を除き、99名を分析対象者とした。分析対象者の性別の内訳は男性84名、女性15名、年齢の平均値は19.95歳であった。

2.2 質問紙

質問紙は、匿名場面でのネガティブ発言の評価、陰口場面でのネガティブ発言の評価、調査対象者自身の性格への回答の順で構成した。なお、性格については本稿では割愛する。ネガティブ発言の評価では、仮想の場면을提示し、ネガティブ発言への心理的ダメージを0～100で回答するようにした。ネガティブ発言は大学生14名を対象に行った予備調査にて収集し、著者ら6名で検討して選定し、作成したものである。

匿名場面では、調査対象者自身の発表に対して、匿名の聴衆からコメント(ネガティブ発言)を受け取ることを想定した。場面の説明文は「あなたは、ある大学の合同発表会に参加しています。あなたの発表が、支離滅裂な内容で、しどろもどろな話し方であったため、制限時間を大幅に超えてしまいました。そのため、他の参加者の発表時間が削られてしまいました。」とした。匿名場面のネガティブ発言は15個あった。「死ね」に関する項目の順は、「死ね」が3番目、「生きてる価値ない」が10番目、「死んでほしい」が12番目、「氏ね」が15番目であった。その他の11項目は「死ね」発言との関連が小さいネガティブ発言であるフィラーであった。

陰口場面では、調査対象者を除いた友人のSNSのグループがあり、そこで調査対象者に向けて言われている陰口を見せられたことを想定した。場面の説明文は「あなたには、いつも行動を共にしている同級生グループがあります。そのうちの1人が、あなたにスマートフォンの画面を見せてきました。そこには、自分も利用しているSNSの自分以外のグループメンバーがメッセージのやり取りをしており、あなたについて言及していました。」とした。陰口場面のネガティブ発言

はフィルターを含めて22個あった。「死ね」に関する項目の順は、「死ね」が15番目、「生きてる価値ない」が20番目、「死んでほしい」が6番目、「氏ね」が22番目であった。なお、陰口場面と匿名場面のフィルターの内容は異なっていた。

2.3 手続き

調査対象者すべてに、集団で一斉に、研究の説明を行った。研究に関する説明を行った後、研究参加への意思を確認した。研究参加による成績などへの影響はないこと、課題への回答は途中で止めることができること、集計した結果が公表される可能性があることを伝えた。次に、質問紙への回答と提出によって、研究参加に同意とみなすことを伝えた。最後に、他人の回答用紙は見ないように注意を促し、課題への回答を求めた。

3. 結果

匿名場面と陰口場面における心理的ダメージの平均値を、Figure 1に示す。場面(匿名, 陰口) × 発言(「死ね」「生きてる価値ない」「死んでほしい」「氏ね」)の2要因分散分析を行ったところ、交互作用の効果は有意ではなく($F(3, 784) = .07, p = .98$)、場面の主効果($F(1, 784) = 4.40, p = .04$)、発言の主効果($F(3, 784) = 7.24, p < 0.001$)が有意であった。心理的ダメージは匿名場面に比べて陰口場面において高かった。また、「死ね」「生きてる価値ない」「死んでほしい」の3つに比べて、「氏ね」の心理的ダメージは低かった。フィルターの心理的ダメージの平均値は、匿名場面で30.89、陰口場面で35.19であった。

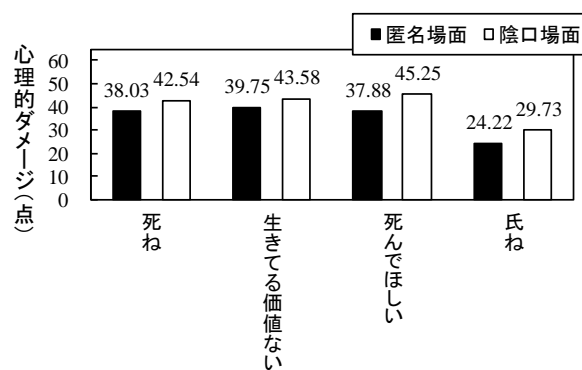


Figure 1 匿名場面と陰口場面における心理的ダメージ

4. 考察

本研究から、2つの場面を通して、「死ね」に関する4つの形態の心理的ダメージが明らかになった。重要な点として、「生きてる価値ない」や「氏ね」は、「死ね」に比べて間接的な表現であるにもかかわらず、「生きてる価値ない」に比べて「氏ね」は心理的ダメージが低かった。また、この傾向は2つの場面で共通してみられた。「氏ね」は「死ね」のWEBでの隠語とされるが、送り手も受け手も冗談交じりで本気ではない「死ね」だと理解される表現なのであろう。インターネットプロバイダやインターネットサイトの管理者や利用者が発言を規制する際の基準に、この結果を応用するならば、他の3つの発言に比べると、「氏ね」は強く規制されるべき表現ではないといえる。

ただし、本研究はあくまで、2つの場面における、限られた発言における心理的ダメージを、一部の調査対象者によって明らかにしたのみである。当然、悪口や誹謗中傷とされるべき発言は、その発言の言い回し、場面、時代や世代、発言を受け取る個人の特性など、さまざまな条件によって変わると予想される。本研究がどのような条件にまで適用可能であるのかについては、今後の検討が必要である。

謝辞 本稿は、ノースアジア大学の卒業研究のために行われた調査データを元に作成した。荻原陽登氏、阿部啓人氏、藤原海氏、木村恋氏、黒崎涼斗氏の5名に感謝したい。

参考文献

- 石坂達也・山本和英 (2010). 2ちゃんねるを対象とした悪口表現の抽出 言語処理学会第16回年次大会発表論文集, 178-181.
- 小向太郎 (2021). ネットの誹謗中傷問題は解消するのか?—プロバイダ責任制限法改正と今後の課題— 情報処理学会論文抄録, 11, 55-61.
- 松葉達明・柳井文人・河合敦夫・井須尚紀 (2011). 学校非公式サイトにおける有害情報検出を目的とした極性判定モデルに関する研究 言語処理学会第17回年次大会発表論文集, 388-391.
- 総務省 (2022). #NoHeartNoSNS(ハートがなけりゃSNSじゃない!) https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/kyouiku_joho-ka/no-heart-no-sns.html (最終閲覧日: 2022年1月11日)
- 読売新聞オンライン (2020). ネット中傷摘発 悪質な匿名投稿者への警告だ 2020年12月18日社説 <http://www.yomiuri.co.jp/editorial/20201217-0YT1T50246/> (最終閲覧日: 2022年1月11日)